

ベーシック・イングリッシュの背景と原理

片桐 ユズル

ベーシック・イングリッシュは1925年ごろからかたちをとりはじめ、¹⁾ オグデンが *Basic English* という本にまとめたのは1930年だから、今年で60年になる。そして1943-4年にチャーチル首相とローズベルト大統領が支持を表明したことで爆発的に局面がかわるのだが、それにいたるまでに書かれた本をよみなおしてみても、今おどろくことは、そこに反映されている理想主義だ。ベーシックだけではなく当時の知識人たちが未来に向けて、ああしよう、こうしようと、理想を実現する方法をいろいろ計画していたことがわかる。それにくらべると今は、やみくもに発達しすぎてしまったものを、どうコントロールし、あとしまつしようか、まだまにあうかしらと、おろおろしている。

世界中のひとびとが、共通の記号体系をつかうことで、たがいにわかりあうようになれば世界は平和になる、というつもりで、エス

ペラントをはじめ何百という国際補助語が提案されたことは、理想主義的だといえる。さらに、そのような共通語は、普遍的にしてアイマイさのない規則によってなりたつものだから、もやもやした思考をはっきり明快化することもついでにできるはずだ、という理想もそこにはふくまれていた。²⁾ たえば数式のようなもので情報交換ができれば理想的だ、とおもうようなひとはいるものだ。

しばしば語られるように、ベーシック・イングリッシュの可能性を「発見」したのは、オグデンとリチャーズが『意味の意味』をかいているときに、いろいろな語を定義することをしていたが、定義のときにつかわれる語はどうやら、ある少数の語がくりかえしくりかえし使われるらしい、ということに気がついた。リチャーズの思い出によると、オグデンと『意味の意味』をかきはじめたのは、第一次大戦のおわったその日に、ケンブリッジ

目次	ベーシック・イングリッシュの背景と原理	片桐ユズル	1
	日本のベーシック・イングリッシュ運動	梅本 裕	8
	時空を越えるEPの絵	柳沢 康司	11
	Basic Japanese を模索する	小川 和子	14
	室 勝訳『方丈記』を読む	安西 聖雄	17
	Basic English 関係ブック・リスト		18
	GDMと言語習得の原理	佐藤 正人	19
	活動報告 (1988年9月~1989年8月)		22
	新刊紹介 (The Basic Dictionary/はじめてのにほんご)		24

の町のオグデン経営の書店は右翼の学生におそわれ、ガラスをわれ、本や絵やピアノは道にはおとり出された。オグデンは平和主義で無神論であったからだ。ところでその夜、そのさわぎを目撃していたリチャーズのところに、オグデンが暴力学生の名前をたずねに来て、いつのまにか語りあかして「定義」の「定義」について意見が一致してしまったのだ。³ やがてオグデンはロンドンに出て、キーガン・ポール書店をときふせて1921年に International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method の編集者となり大成功する。このシリーズの目的は「心理学とその隣接科学で最近おこった目ざましい成果を、入手しやすい形と値段で提供すること」でG. E. ムーアとかヴィトゲンシュタインなどの分析哲学、ケーラーなどのゲシュタルト心理学、マリノフスキーなどの人類学などを英語圏に紹介した功績は大きい。オグデンはまた同じ出版社から History of Civilisation Series; Today and Tomorrow Series; Psyche Miniature Series などを相ついで出版させ、これらもたいへんヒットした。⁴

The Meaning of Meaning は1922年に International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method の一冊として発行されたが、同じ年にもう一冊オグデンの訳で、ヴィトゲンシュタインの *Tractatus Logico-Philosophicus* (『論理学哲学論集』) が出た。Ludwig Wittgenstein (1889-1951) はオーストリアのひとで、のちにケンブリッジでくらすようになり、1939年に、G. E. ムーアのあとをついで哲学の教授になった。彼は初期には「ウィーン学団」の論理実証主義と接触していた。そのかんがえはかんたんといえば、たとえば「検証可能性」ということは「一つの命題の意味は、その検証方法である」。⁵ この立場は、すべての哲学的思考をたわごととしてしりぞけてしまうという難点があった。⁶ これらの学者はナチをのがれて英語圏にわたり、「イギリス経験論」の古い伝統とむすびついて、いわゆる言語分析学派となる。このひとたちのかんがえは、論理実証主義と同じく、バートランド・ラッセルの説明によれば

正統の哲学的混乱のすべては言語のずさんな

使いかたの結果だという原理に立っている。あらゆる疑問は、正しく公式化すれば、明確な答えが出てくる、とかれらは主張した。「哲学的」疑問が、言語の不注意な濫用から生ずることを示すのが、分析の課題である。いったんこのような疑問の曖昧な個所が明るみに出されるや、これらの問題は無意味とわかり、簡単に解消する。哲学は、正しく使用した場合、このように、或る種の言語的療法と見ることができる。⁷ (東宮隆訳)

ヴィトゲンシュタインの本のタイトル *Tractatus Logico-Philosophicus* はG. E. ムーアがおもいついたものだといわれているし、序文はバートランド・ラッセルが書き、ややこしいドイツ語からの訳はオグデンが著者と手紙のやりとりをしながら、Frank Ramseyの力をかりて、おこなった。というわけで、この本は、これらのひとたちがよってたかって英語圏へひっぱりこんだといえる。その結果は、やがては哲学の流れをかえてしまうことになる。この『論集』のこのヴィトゲンシュタインには

すべての命題を分析して、もはやそれ以上打ちこわすことのできない、単純な究極の構成要素にすることが、可能のように見えていた。したがって、この理論は、論理的原子論と時に呼ばれることがあり、単純な根本原理という、初期合理論の教えと、共通なものを多分に持っている。それは完全な言語というものを打ち建てようとする、すべての試みの根底にあるものである。このような言語は、あらゆるものを極度に正確に述べることとなる。⁸

ベーシックにおなじみの読者は、ベーシックとヴィトゲンシュタインの『論集』にある、種の平行関係が見えるだろう。オグデンは1937年の *Basic English and Grammatica Reform* で、われわれの予期に反して、「文法」ということを思考の手づきというような意味に定義しなおしている。教育の世界から古いラテン文法をおいはらってしまったことは、よいことであつたが、そのかわりに新しく入ってきたことは、街頭のことばの表層を使用頻度でとらえ、かたまりとして、やみくもに暗記してしまうこ

とになってしまった。ことばが道具であるとして、その道具なり機械なりの構造に自覚的になれば、言語能力がたかまるばかりでなく、丸暗記など不必要になる。そのためのたすけになるものが、新しい「文法」である、といている。⁹新しい文法は、ひろい意味での人間の記号活動の一部として言語が位置づけられたときに、解釈の科学として生れかわるであろう。ことばを指示的用法と情動的用法に分けることは、そのような方向へむかって、ある種の基準となる。¹⁰さらに“Linguistic Therapy”ということで Word Magic がいかに心身の健康と成長を阻害しているかを説き、その解毒剤としてベーシックの可能性をかんがえている。¹¹ こんなふうに見てくると「ベーシックはわれわれのしゃべりかたを変えることよりは、われわれが何をしゃべるかについての異った態度を促進するものである」オグデンはいつている。¹² その態度とは一言でいえば、ひとのかんがえることは Fiction にもとづいている、という自覚といえよう。

しかし国際補助語ということをかんがえるとき、日常のごくかんたんなことでも、記号論理学のルールにのせたら、すごくややこしいことになって、とてもしろうとの手にはおえない。一方、英語という自然言語のなかで「定義」ということをするとき、くりかえしあらわれてくる、ある少数の語は、意味の原子のようなものではなからうか。それはベーシックにおいて“disembark”というようなかたまりの動詞を“get off a ship”と分解したように、go, come; take, put; give, get; keep, let, make; be, seem のような動作とか、after, before, between, among, at, by, down, up, from, to, on, off, over, under, など方向をあらわす語はそうである。しかし say とか send という語は、put into words とか、make~go と分けてもいえることを、ひとまとめにした言い方だから、原子のレベルではない。これらがベーシックの語表にいれてあるのは、はなしがあまりにゴツゴツせずに流れるようにするためである。Into とか in front of というような場合は、原子がふたつとか、みっつとかむすびついたことが露骨に見えているのでベーシックではゆるされる。

Content words のことになると、オグデンは、あえてレベルをそろえなかった。Dog と animal はあるが、beagle や bitch のような小区別や、dog family 全体をしめす canine はない。あるいは apple, fruit, food という抽象の各レベルがあるが、potato, root, plant はそれと対応しているとはいえない。しかし、われわれの日常のはなしのレベルでは、イスとかリンゴとかジャガイモというようなことでたいい用がたり。これはまた認知心理学でいう認知の基礎水準のレベルである。「ところでベーシックには chair がないではないですか。ふつうわれわれはイスは chair だとおもっているが、ベーシックでいうように seat とおもうためには、頭のなかでなんらかの操作が必要です。」

「われわれ日本人はイスだとおもっても、じつは英語人間にとっては bench だったり、stool だったり、sofa だったりする。つまりイスという日本語は chair, bench, etc. という英語より抽象のレベルが高いのです。もちろん seat はイスもザブトンもふくみますから、もっと上のレベルですが、翻訳というものは、多くのばあい、同じ抽象度でのおきかえはできないものです。たとえばアニとかオトウトに対して brother は抽象度が高いです。それにくらべて stockings, socks はクツシタよりも抽象度が低いです。」同じ抽象度を維持できなくても、指示物をきちんと指示できれば、それでよしとしなくてはならない。それどころか、ひとつのことを、いろいろに抽象のレベルをかえて示すことで、つまり、いろいろな焦点深度で写してみることで、それまで見えなかったことが見えてくる。これを vertical translation という。

ところでオグデンが chair よりも seat をとったことのもうひとつの理由は、Seating himself in the four-seater, he said to me, “Please be seated.” のように -ing, -er, -ed をつけて seat ということばはいろいろにつかうことができるからだ。このように語形の原子ができるだけ透明にすけて見ることが学習しやすいことだとオグデンはかんがえた。このことを clear に説明しようとする、clarify というひとまとめの動詞をつかえば、

もとの clear という字はちょっと見えにくくなっている。さらに clarification という名詞にすると fy → fi という操作がはいつてきて、試験のときの落とし穴がひとつふえる。できるだけ落とし穴のない学習をさせたいとおもえば、clear → make clear → making clear というふうにして派生語をつくらずにすませることである。

そういう意味では語形変化をしないことが理想で、たとえば中国語のように、英語でも 'I cut,' 'we cut,' 'they cut,' -today and yeasterday-'I have cut,' 'the cake is cut,' 'a cut cake,' 'a cut off the cake,' という例をオグデンはあげ、しかしざんねんなことに 'he cuts' だといっている。この不規則な三単現のsを Sir Richard Paget は「非英語的」といったそう¹³。これは最近しばしばいわれている英語習得の自然な順序としても、かなりおそい段階でなされることだそう¹⁴。英語がもし本来のいきおいで変化をつづけていたならば、この不規則なsも消えてなくなっていたはずなのに、書きことば、印刷術、教養などがじゃまをして、そこまでのかないうちに今の形に固定化されてしまった。

じつは英語はそのむかし古代英語 Old English といわれたころ、たいへんややこしい活用をする語形変化のはげしい言語であった。このころアングロ・サクソン人はしばしばデン人への侵入をうけ、これら近似的な語族のひとたちがしゃべりあっているうちに、だんだん男性・女性・中性のような名詞の区別や四つもあつた名詞の格変化が消えた。また helpan, healp, holpen というような動詞の変化は、help, helped, helped というように規則的になった。Walk, climb, step をはじめとして40以上の動詞が中世英語 Middle English 初期までに規則変化をするようになった¹⁴。あるいは複数もsをつけるだけの規則的なものになった。もうすこしのところで、sheep のようにsも不要になったかもしれない¹⁵。child-children, foot-feet のようなものは古代のなごりである。あるいは this hat が、複数になるとなんで these hats にならなくてはならないのか、his のときは、hish at, his hats でよいのか？ これは文法のことばでいうと「呼応」ということが、this/

thatのときだけのこってしまったのだ。しかしフランス語ではいまだに名詞の性・数に呼応して、そのまえの所有代名詞がかわらなくてはならない：ma femme et mes enfants.

ラテン語では名詞が主格になったときと、目的格になったときで、語形がちがうから、語順は重要でない。しかし現代のロマンス語では格変化をしなくなり、そのかわりに語順でどれが主語で、どれが目的語かきまるようになった。古いインド・ヨーロッパ語では名詞は男性・女性・中性があつたが、今では三つのこっているのはドイツ語とかギリシャ語で、オランダ語やフランス語では二つにへり、英語では完全になくなってしまった¹⁶。

ラテン語の "fuisse" という1語を現代英語に訳すとしたら "I should have been" という4語になる。ということは動詞の活用により一語にこめられている、いろいろな要素をとりだして、別々の語であらわす、つまり「分析」ということだ¹⁷。そしてインド・ヨーロッパ語の歴史は、むかしはかたまりであったものをばらして、代名詞、前置詞、助動詞というようなかたちで外へ出すことと同時に、ますます語順にたよるようになってきた。この分析的傾向がもっともすすんだのが英語である。それが英語を学習しやすいものにしたと、メイエのようなフランス人の学者もいっている¹⁸。あるいはサピアも「言語が分析的であればあるほど、他のすべてのひとびとを仲介するメディアとして役立つ」とか、接頭辞・接尾辞をまなぶということは単にふたつの語をむすびつけるより操作としてはるかにむづかしいらしい。だから「ひとつひとつの要素をそれぞれ別々に表出することは心理的にたいへんな利点になる」といったそうである。このことはインド・ヨーロッパ語でない東洋系の学習者にとって特にかんがえなくてはならない。それだけでなく、さらにオグデンはつけくわえて、「きまり文句をできるだけ定義でおきかえることは、あらゆる種類の言語依存症やコトバの魔術に対する解毒剤になる」といっている¹⁹。(たとえば bitch を female dog といいかえると、悪感情が消えてしまう。)

ふしぎなことにサピアは一方でエスペラントをあまりにもインド・ヨーロッパ的で分析的で

ないと批判しながら、ベーシックにも賛成せず、人工言語の可能性を研究している。たとえば母音は3つ (a, i, u) 子音は8つ (p, t, k, s, l, m, n, v) にかぎり、すべての音節は母音でおわるようにしたらよいかんがえた。この組合せで3音節以内で20000語をつくることができる、といった。²⁰

オグデンの『バベルをやめるために』(1934)を見ると、そこに引用されている文献は主として1925-1931年だが、じつにホットに普遍言語とか国際補助語の問題が論じられている。エスペラント、Ido, Novial のような人工語にするか、自然言語にするか。自然言語なら、英語は発音がむつかしいし、中国語は使用人口が多いし、etc., etc. リチャーズは1943年の *Basic English and Its Uses* でもさかんに、他の言語にくらべて英語がどのように有利であるかを説いていた。しかし1990年のいまは英語がそうってしまったことはあえていうまでもない、あたりまえのことである。

しかし太平洋戦争前の日本の知識人向けのジャーナリズムを見ると、いちばんえらく、手本にするべきなのはイギリスであった。アメリカは未開の地で、文化からほどとおいと、ばかにされていた。戦後、この比重は逆転する。ベーシックがかたちをとりはじめたころトーキーがあらわれ、ハリウッドから世界中にアメリカ英語がばらまかれるようになった。「下品な」アメリカ英語をストップさせようと純粹主義者たちのはかない抵抗もあったが、娯楽のメディアにのって英語は世界各地に浸透した。またラジオの普及は、ヒトラーやムソリーニの勢力をのばすのにも役立たせられたが、不特定多数のひとにわかってもらうために、各国語の発音を統一化しなくてはならなくなり、英国ではBBCとか日本では日本放送協会の発音により、それまで方言にさまざまげられていたコミュニケーションが容易になった。

オグデンはラジオのこともかんがえて、同音異語をベーシックではつかわないようにした。たとえば、「種類」は sort をつかって、kindはつかれないようにしたのは、しんせつ kindなことであった。Pieceとpeaceは同じ音だからやめにして、ベーシックにはbitをい

れた。Goがあるから、とうぜんleaveという動詞と、その変化leftはのこす必要がないから、左のleftとこんがらがることはない。

ラジオの必要から一種の標準的な発音があらわれてきた。それと同時に、つかわれる単語とか文章構造も、ずいぶん平易なものになってきた。オグデンは1931年にラジオでムソリーニが英語で演説したのに深い印象をうけたが、用語はまだまだやさしくすることができるはずだ、といった。²¹ 1933年に発表された土居光知の「基礎日本語」は「大多数の高い教育を受けない日本人のためにたやすく知識を伝える文体」を目的とし、ラジオできいてわかる日本語をめざした。それほど戦前のことばは漢語による知識のことばと、ふつうのひとのふだんのことばの分離がはげしいものであった。このような日本語の状態では、知識がひろくゆきわたらず、民主化のさまたげになる、という認識で敗戦後、新かなづかいと、漢字制限がおこなわれた。このようなまれなチャンスでもないかぎり、国語国字の改革はむつかしいものであり、敗戦は日本語にとってラッキーであった。

英語の発音と綴字が一致しないことは、国際補助語としても致命的な欠点であるとしてしばしば指摘されるところである。また教育的にもムダな努力をしていることになる、ということもあって、英語を新かなづかいにすることは多くの学者たちがやりたかったが、できなかったことだ。一番有名なのは *My Fair Lady* のもとになった *Pygmalion* という劇をかいたバーナード・ショーは遺産を綴字改革運動のためにつか寄せた。唯一の成功した例は、アメリカ独立当時の反英ムードにのって字引で有名な Noah Webster (1758-1843) が、colour, theatreなどを color, theater などとアメリカ式にかえた。

オグデンはスペリングには手をださないことで、あまりひとをシゲキしないようにした。しかし語数を850にへらしたことで、不規則なスペリングもそれほど重荷ではなくなるとかんがえた。また文型についてもパーマーは27もあるとおもった。²² 第二次大戦後のスクールグラマーでは「5文型」というようにへったが、オグデンは1文型とかんがえた：

I will put new theories before you now.

これはベーシックでは動詞を16にへらしてしまったから、他の動詞にかかわる文型は自然に排除されるからだ。しかしこのパターンには英語のすべてがある、とオグデンはいう。動きをはじめもの、時間をしめす助動詞、うごきのことば、修飾語、うごきをうけるモノ、方向、うごきをうけるヒトあるいはモノ、うごきのしかた——の8つの要素である。²³ 他の文型は、これのどれかの要素が欠けたものとか、拡大されたものとかにかんがえればよい。これはほとんどすべての場合にあてはまる数式のようなものだ、といえるようにおもう。

アメリカ的表現は、1930年ごろは、下品なものとしてされていたから、International Library of Psychologyの本にするためには、イギリス式表現にかえなくてはならなかった。このしごとはオグデンにとって、いかにも電灯をやめて、ローソクの時代にもどっていきようなむなし作業のようにおもえた。これは国際語ということから見ても逆行であった。アメリカ英語においては、get in, get out, get over, get under, get acrossの延長としてget busyというのがあり、get readyがprepareにかわりつつある、とオグデンはアメリカニズムを評価した。²⁴ ところが一方、1944年にボストンの教育委員は“too British”という拒否反応をしめた。²⁵ ということは、ベーシックが、イギリス英語とアメリカ英語とソノタノ英語から、もっとも規則的で学習しやすい部分を取りだして、無国籍英語をつくりあげた、ということを示すとおもう。「それは〔ロンドン的高级住宅地〕メーフェアの英語でもなければ、シカゴの英語でもないだろう。それにもかかわらず、まぎれもなく、ある種の英語なのである」と1931年にロイド・ジェームズはいった「それは東洋人のみでなく西洋の非英語人間も容易に学習できるものであり、英語人間にとっても、時に奇妙にひびくことがあっても、完全に理解できるものである。」²⁶ ここに、その文化にあこがれ同化したいとおもわなくても、英語学習の可能性がひらけている。たと

えば世界平和をめざすCISV(Children's International Summer Village)というボランティア組織の活動をとおして水谷広子さんの体験したことは、そういうことであつたとおもう。²⁷

英語のスペリングを不規則にする大きな理由のひとつに、ノルマン人の侵入によりフランス流の書きことばが入ったことと、ルネサンス期にラテン系のことばが多量にはいつてきたことがあげられる。平易な英語をつかうことイコール、単音節のアングロ・サクソン系のことばをつかうこと、のようにおもいこんでいるひともいるようだが、オグデンはむしろ英語の雑種性を高く評価して、ベーシックを純粹英語でかためなかつた。ベーシックは自然言語でできた小宇宙であり、そこには英語をなりたたせている各種の要素がある。ベンジャミン・リー・ウォーフは、ベーシックはあまりに英語的な特徴をあつめて、煮つめたようなものだから、国際補助語にむいていない、といった。一方、普遍言語とか意味の原子というような考えも、ベーシックへの原動力として無視することはできない。とにかく、この小宇宙は、きわめて限定された要素でなりたっているのだから、一種の実験的環境として、ことばのうごきを観察するのに、ぐあいがよい。その観察からリラーズはGraded Direct Methodのみならず、多くの業績をうみだした。その観察は特にcontext というものの重要性を気づかせた。

ベーシックを支持した文学者としてバーナード・ショーやH. G. ウェルズは知られているが、エズラ・パウンドとオルダス・ハクスリーは、もやもやははっきりさせるための訓練としてベーシックを評価した。²⁸ 「ベーシックに訳しても大丈夫な小説家は、なにか本物もっている」とパウンドはいった。²⁹ オグデンが *Debabelization* (1931) を書いたころ、バベルは異った国語のあいだにあつたようにおもえた。しかし今は英語とかコンピュータの言語で国家をこえたコミュニケーションがさかんである。むしろバベルは、異った専門と専門のあいだ、専門家と非専門家のあいだにあるようにおもえる。だれにもわかる平易なことばをつかえという気運は Sir Ernest

Gowers, *Plain Words* (1948) とか Rudolf Flesch, *The Art of Plain Talk* (1951) などのころつよかったが、今ことさらに必要が感じられる。そのときにオグデンをふりかえてみると、彼は International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method の編集者としてやったことは、いわゆる「コチコチの科学」をさげ、自己満足的な専門の袋からはみ出してしまうような、そういう文化の発展を促進させるようにもっていくことであった、と「編集者・博識人としてのオグデン」は評価されている。³⁰ そのひとの発見したベーシックは異専門間コミュニケーションのメディアとして見なおされ、*The Science Dictionary in Basic English* (Evans Brothers Limited, 1965) もおもいだされるべきだろう。³¹

わたしたち非英語人間は、ベーシックをつかうことで効率的に英語を学習するばかりでなく、そのプロセスにおいて思考の訓練にもなってしまう、という二重の恩恵をうけることができる。(March 1990)

NOTES

1. Russo, John Paul, *I. A. Richards: His Life and Work* (London: Routledge, 1989), p. 398.
2. Crystal, David, *The Cambridge Encyclopedia of Language* (Cambridge University Press, 1987), p. 353.
3. Richards, I. A., "Co-Author of the 'Meaning of Meaning'" in Florence, P. Sargant and J. R. L. Anderson, eds., *C. K. Ogden: A Collective Memoir* (London: Elek Pemberton, 1977), p. 97-100.
4. Zuckerman, Lord, "Talent Scout and Editor," in Florence and Anderson (1977), p. p. 122-132.
5. ラッセル, バートランド『西洋の知恵 — 図説哲学思想史 (下)』東宮隆訳 (社会思想社、1968), p. 259.
6. *Ibid.* p. 260.
7. *Ibid.* p. 262.
8. *Ibid.* p. 264.
9. Ogden, C. K., *Basic English and Grammatical Reform* (Cambridge: Orthological Institute, 1937), p. 1.
10. *Ibid.* p. 3.
11. *Ibid.* pp. 13-16.
12. *Ibid.* p. 2.
13. *Ibid.* p. 7.
14. Crystal, p. 330.
15. Ogden, *Grammatical Reform*, p. 7.
16. Crystal, p. 330.
17. Smith, Logan Pearsall, *The English Language* (Tokyo: The British Literary Center, 1952), p. 4.
18. Ogden, C. K., *Debabelization* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1931), p. 148.
19. *Ibid.* pp. 106.
20. *Ibid.* pp. 51.
21. *Ibid.* pp. 117-8.
22. Palmer, Harold E., *A Grammar of English Words* (Longmans, Green and Co., 1938).
23. Ogden, *Grammatical Reform*, p. 10.
24. Florence, P. Sargant, "Cambridge 1909-1919 and its Aftermath", in Florence and Anderson, pp. 51-2.
25. Russo, p. 403.
26. Ogden, *Debabelization*, pp. 75-6.
27. 水谷広子、口頭発表 (Basic English Workshop, Tokyo, 1990).
28. Huxley, Aldous, *Letters*, ed. by Grover Smith (London: Chatto & Windus, 1969), p. 491.
29. Russo, pp. 402-3.
30. Zuckerman, in Florence and Anderson, p. 130.
31. Published in the United States under the title *The Basic Science Dictionary* (New York: The Macmillan Company, 1966).

日本のベーシック・イングリッシュ運動

—中瀬古六郎・市河三喜・岡倉由三郎を中心に—

梅 本 裕

はじめに

この小論では、1930年代の初頭に始まり、その後約10年間続いた日本のベーシック・イングリッシュ運動の様子を、三人の人物の活動に即して紹介する。

まず京都の中瀬古六郎、次に東京帝大英文科教授の市河三喜、そして明治の後半からずっと日本の英語教育界の大御所だった岡倉由三郎。この三人をとりあげることにする。

1 中瀬古六郎の場合

中瀬古六郎は同志社で教鞭をとる化学者だった。言語問題に深い関心をもっていた中瀬古は「京都基礎英語会」をつくり、その中心人物として主として関西地方でベーシック・イングリッシュの紹介、啓蒙に取り組んだ。

彼のベーシック・イングリッシュにかかわる活動で注目すべきは次の二点である。ひとつは月刊誌『The Basic English Monthly』を発行したこと。もうひとつはJOBK(日本放送協会関西支部)のラジオ英語講座を担当したことである。

まず『Basic English Monthly』について紹介しよう。

中瀬古は1932年10月から1934年7月まで『The Basic English Monthly』という月刊誌を自ら編集主幹となって発行し、実用英語としてのベーシック・イングリッシュの啓蒙につとめた。

この『The Basic English Monthly』は京都の“我等の化学社語学部”から毎月一回発行され、各号のページ数は8ページから10ページ程度であった。

各号には、ベーシック・イングリッシュのシステムについての日本語での解説、長短様ざまのベーシックの文例、文献の紹介、英国からのベーシックによる便りなどが掲載されている。

「発刊の辞」(Vol. 1 No. 1 1932年10月 1

日)で中瀬古は次のように述べる。

「我国に於ける英語教育の行き詰まりは今や其極に達した。将来東洋の派遣を握って自立すべき筈の吾が幾十万の青年学徒は中等教育の課程に於いて、一週6-7時間高等学校に於いて15-20時間の貴重なる青春一刻千金の光陰を之が習得に使費してをるが、しかも其得た所は果たして何ものぞ?

英語の修業を実用化し簡易化し、スピード化せんが為に、昨年来我国に於いて勃興したる新語学教育運動は即ち Basic English の採用普及の一途に集中された。苟も学術上に商業上に社交上に旅行用に通信用に将た亦日常の新聞用語に、成るべく自由なる意見の暢達を計り、成るべく敏速なる認識の普及を思うものは、天下翕然として、其活路と捷徑と

THE BASIC ENGLISH MONTHLY

VOL. 1 DECEMBER 1, 1932 NO. 3

FRIENDS

G. Daikoku, Agr. D. (President, the Daikoku University; late President, the Kyushu Imperial University).
S. C. Barrett, B. A., M. A., D. D. (Professor, the Daikoku University).
Arundel Dai Ra (Professor of English Literature, Taihoku Imperial University).
Mary F. Dawson, Edu. D. (Professor, Girls' College of the Daikoku).
K. Doi, Litt. D. (Professor, Tohoku Imperial University).
S. Ichikawa, Litt. D. (Professor, Tokyo Imperial University).
Ame Imano, Ph. D., Agr. D. (Oman Experiment Station, Obayama-Ken).
Y. Ohnaka (Head of the Department of Literature, St. Paul's University, Tokyo).
I. Shimamura, Litt. D. (Professor of Philology, Kyoto Imperial University; Member of the Imperial Academy).

CHIEF WRITER

Rokuro Nakasaka, M. S., Ph. D., Sc. D. (Lecturer, the Daikoku University; Lecturer, the Third National High School; Chief Writer of Nis Kyojin).

Basic English の 目 的

(實用化された英語)

若れ等が 単純化された英語、合意化された英語を主眼とする運動の 主なるものは、唯だ夫の範圍に留してはなるに—

(1) Basic English は 本来の英語を 別て改造したものでなく、變形したものでない。また特別の文法を 新に制定したものでない。唯 基礎語彙を 単純化し、英語彙を極品化し、その語彙を合意化したに過ぎないものである。更に 之を擴張すれば。

(2) 今日の大英圏中東に 強調せられた 語彙は 大約三十萬語以上に達して居つて、日見減見の勢である。それは 可成り多量である。是れでは 寧ろ外國人たる初學者に於て 予の學びやうもない英語である。

(3) 我らに 英語を母語として居る 英語圏の人口は 約一億八千萬人に達し、英語を公用語として用ゆる 印度 アフリカ 南洋等の人口は 約三億八千萬人の多きに上り、此總計 五億六千萬人である。此其人口の約三分の一は 英語を 母語とするは 官用語 若しくは 通用語として居る。のみならず 國語でも 母語と英語とは 其の公用語と定めて居る。

(4) それで 吾人が 世界の外交、通商、學術交通の中間入りをするには 否でも 寧ろ、或る程度まで 寧ろの 手間の取れぬ 簡便 通即な 英語知識を 所有することが 最も 望ましい事となる。

(5) 一大意見 この從來の 一見極めて 直譯的したる 英語+並りに、之を単純化し 合意化し 進歩化するに必要なる 一大意見を 發けたのは、英國ケンブリッジの C. K. Ogden 氏 及び其同事等であつて、彼等が 始めて 吾人の常用英語の上から 用と凡の不適切語彙を 強直してしまつて 進歩的の 弊が 發見されたのである。

を Basic English に求めんとして来た。」

「The Basic English Monthly は此根本義（自力攻勢—引用者）の上に立って、実用英語を手っ取り早く数ヶ月内に或は少なくとも一ケ年以内に完全に把握せしめんとするものである。」

この引用からもうかがえるように、中瀬古は中学校、高等学校の英語教育の成果があがっていないことを批判し、実用英語としてのベーシック・イングリッシュに英語を実際に使いこなす活路を見いだそうとした。

これはベーシックを国際補助語として活用しようとした Ogden の問題意識を正面からうけとめ実践しようとしたものと言えよう。

中瀬古のベーシック・イングリッシュに関する活動でもうひとつふれておくべきことがある。

当時、JOBK（日本放送協会関西支部）ではラジオによる英語講座がすでに始まっていた。主に中学校の生徒を対象とする講座である。中瀬古はその講座のうち、1932年9月20日から10月21日にかけて放送された中等英語講座を担当した。ここで彼は「Basic English（850語の実用英語）」と題して9回にわたる講義を行った。

講義は、「第一講 Basic English の目的及び其必要」に始まり「第九講 Basic 文学断片」まですべてベーシックの解説であり、この新しい「簡易英語」の啓蒙、普及を目的とするものだった。

このラジオ講座は、この時点においてベーシック・イングリッシュの運動がある程度の社会的影響力ないしは認知を得ていたことを示しているといえよう。

2 市河三喜とBasic Century Readers

次に当時東京帝大の英文科の教授であった市河三喜とベーシック・イングリッシュのかかわりについてみてみよう。

彼は渡英中（1931年春）にオグデンとあって交流したのがきっかけとなりベーシックに深くかかわるようになった。そして自分の編集した中学校用教科書の第一巻と第二巻をベーシック・イングリッシュに書き換えて、教材

としての可能性を探ってみることになった。書き換えは主として Ogden の手によっておこなわれたが、市河も少なくない数の修正意見を出してベーシック版テキストの作成に参加している。

市河は後に当時のことを次のように回想している。

「（ベーシック・イングリッシュが——引用者）国際補助語として或は正常英語の踏台としてどの位役に立つか。多少の無理はあっても trial を与えてみよう、その意向をオグデンに伝え、当時光風館から発行されていた私の Century Readers 五巻を送ってその I、II から材料をとって Basic に書直しで見るとをすすめた。」

市河とオグデンの間では何度も手紙のやり取りが続き、両者の共同作業の結果、1934年7月、Basic Century Readers I、II が研究社から出版された。出版部数は1000部であった。

では、I 巻と II 巻からそれぞれオリジナルとベーシック版の対応する部分をぬきだして紹介しよう。いずれも各課の冒頭部分である。

[Century Readers Book 1 Lesson 5 pp. 18-19]

Here is a boy. / Who is he? / He is Ben. / He is very idle. / Ben is an idle boy. / He is asleep. / Is he not idle? / Yes, he is not idle. / See the idle boy. / His name is Ben.

[Basic Century Readers Book 1 Lesson 5 pp. 13-14]

Here is a boy. / Who is he? / He is Ben. / He is not working. / Ben is a boy who does no work. / He has gone to sleep. / Is he not working? / No, he is not working. / See the boy who does not work. / His name is Ben.

[Century Readers Book 2 Lesson 27 p. 89]

“What a cool, clean, airy place it is,”

ある。」(「基本英語の検討」)

岡倉にとってベーシック・イングリッシュは単なる「簡易英語」ではなかった。それは「思想そのものをその単位に戻して調査」した語彙組織であり、「言語の象徴性に深く眼ざめて」おり「簡潔明快な詞を用ひて、意志の発表を行ふよう我々を呼びさまし」、「言語的良心を誘発する」ものであった。

岡倉のこのベーシック認識は、高田力(つとむ)、新瀬嘉三、宮田幸一ら彼の高弟にも共有され、1930年代の日本の英語教育界に一石を投じた。

おわりに

歴史をふりかえって見るといろいろなベーシック認識があったといえよう。

「事務室で役に立ち、街頭で間に合ふ英語」というとらえ方から、言語の象徴性に分け入る手だてとしてのとらえ方まであった。

歴史を訪ねながら、我々自身のベーシック英語への認識を、護教でもなく棄教でもなくつくっていくのも有益だろう。

付記：この小論は昨年発表した「1930年代のベーシック・イングリッシュの受容について」(京都橘女子大学研究紀要No.16)をベースに執筆したものです。関心をお持ちの方はこの論文もご参照ください。

時空を越えるEPの絵

柳 沢 康 司

Imagine all the people living for today.
(From *Imagine* by John Lennon)

0. はじめに

まるでSF小説のタイトルのような題をつけてしまったが、ここではI. A. Richardsによる *English Through Pictures, Book I, II* (以下EP)の絵について最近考えたことをおもに「時間」と「空間」という2つの視点から述べてみたい。

1. 時間を越えるEPの絵

EPの初版からもう45年になる、たとえば、にわかにしんじられないのは私だけではないだろう。少なくとも私にはEPの絵はほとんど「古さ」というものを感じさせない。時間を超越してしまっている何かがEPの絵にある。今は英語のテキストのほとんどは表現豊かなイラストがついて、しかも色刷りできれいなものが多い。カラフルで見ばえのする絵が主流だから、そういう絵が入ったテキストに慣れた人にはEPの絵は味もそっけもなく、ただ水で煮ただけの野菜料理のように感じられるかもしれない。しかし、皮肉なことに、現代を反映させたモダンでカラフルなイラスト

ほど色あせ古めかしくなるのが早い。世の中は急速なテンポで絶えず変化しているから、今ナウいものはすぐにナウなくなってしまう。EPの線画が時間を超越しているように見えるのは、時間と共に変化していく部分でできるだけ切り捨て、変化しないかあるいは変化の速度が遅いものだけを残そうとしたからではないだろうか。とは言っても、時の流れに勝てなかった絵もEPの中にみうけられる。たとえば、Book IIの12, 13ページの自動車や汽車は絵は今ではもう古めかしい(図1, 2)。私だけかもしれないが、あちこちで登場する帽子の絵も少し時代がかった感じがする(図3)。逆に、最も時の流れに対する頑強さを誇っているのはBook Iの1ページ

図1

Mr. Smith will go to the station in a taxi.



EP Book II, p.12

図2

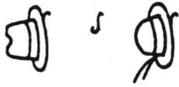
This is the engine of a train.



EP Book II, p.13

図3

She put the hat in the other room.
John went there and got it.



EP Book I, p.74

図4



EP Book I, p.1

ジの最初の絵などだろう(図4)。この線画は人間を極限近くまでシンプルに表したものだから、どんなに服装が変わろうと髪型が変わろうと、人間の体の形が変わって火星みたいになってしまわないかぎり何千年でも何万年でももちこたえられるだろう。私は個人的に4ページの最初の絵がとても好きで(たぶんこの絵のファンの人はいっぱいいるのではないかと思う。)、これを見ていると勇気がわいてくるような気がする(図5, 6)。

図5



EP Book I, p.4

図6



EP Book III, p.1

人間が意志を持ち、自分の存在を意識するというのは人間にとって最も基本的で大切なことのひとつなのだろう。それは時間・空間を越えた価値であり知性であると思う。Book Iの1ページの絵とBook IIの12, 13ページの絵は時の流れに対する耐久性の尺度の両極にあって、EPの絵はこれら2極の間の様々な段階に位置していると思われる。しかし、全体としてEPの絵は時間にたいしてかなりの耐久性をっているといえる。Richardsがシンプルな線画を用いたのは、学習者が理解しやすいようにという配慮からであるのはもちろんだが、それに加えて長い時間を経ても変わらない人間の日常的な経験の最も基本的な部分をできるだけ表現したいという動機があったのではないだろうか。

2. 空間を越えるEPの絵

時間を縦軸とすれば空間を横軸にとることができる。空間は地球全体に広がり、その中でEPはさまざまな環境的・文化的背景を持った人々の目にふれる。空間の中のEPはどんなふうに見えるだろう。ここでまた、他のテキストと比べてみるとすぐに気づくのは、多くのテキストは英語文化圏、特にアングロサクソンの文化を強く意識しており、それを色濃く反映させている。これに対し、EPの絵は文化的・民族的な個別性をできるだけ排除しようとするまったく逆の方向を向いているように見える。たとえばEPの絵では、服装、顔、膚の色などを細かく描いたりして地域や民族の違いを表そうとすることはけっしてしていない。ある特定の文化に縛られることなく、人間であればどんな文化や環境のなかで生活している人でも理解できるように、という意図と願いをもってRichardsはEPの絵を描いたのだろう。それがシンプルな線画をもちいた第3の動機ではなかろうか。EPの線画は時間と共に空間をも越えようとする表現形式ということになる。ここでもさきほどの時の流れに対する耐久性と同様に、どのくらい空間を越えられるかというスケールの上の様々な程度にEPの絵を位置づけることができる。最も越えやすい絵の一つは先ほどと同じく1ページの最初の絵だと思われる(図4)。この絵を人間と思わない人は世界中どこへ行ってもいないだろう。しかし、男女の区別をスカートのあるなしでわけるのはどうだろうか(図7)。これは地域によっては理解できない人がいても不思議ではない。(だからといって他によい表現方法を私は思いつかないのだが……………)また、このスケール上で最も空間を越えにくいと思われる絵の一つは、Book Iの86~87ページのニュートンの話を描いた部分だろう(図8)。

図7



EP Book I, p.1

図8

That is the story.
The story may be true
or it may not be true.



EP Book II, p.87

世界にはこの逸話を知らない人がたくさんいるかもしれない。しかし、やはり全体としてはEPは空間を越える強い力を持っているものと思う。

3. EPの絵とイメージ・スキーマ

EPをみていると、時間空間を越えやすいと思われる絵ほどシンプルで抽象的であり、越えにくいと思われる絵ほど具象的で複雑であることに気づく。このことに関して私が考えるのは、人間は心の中に世界をとらえ理解するための限られた数のきわめて抽象的な図式を持っていて、それらの中の基本的な図式の多くは全人類が時間空間を越えて共有しているのではないか、ということである。これらの心の中の普遍的な図式に近ければ近いほどEPの絵は時空を越えやすくなるのではなからうか。

ここで思いあたるのは、最近「認知意味論」と呼ばれる分野で議論されている「イメージ・スキーマ (image schema)」である。レイコフ (Lakoff, 1987) は、イメージ・スキーマをカントの三角形をひきあいになだしておおよそ次のように説明している。すなわち、私達が紙などの上に、あるいは頭の中で視覚的にイメージとして描くことのできる三角形はそのつど異なったもので、二度と厳密な意味で完全に同じ三角形を描くことはできない。とすれば、寿命などの制約がなければ無限個の異なった三角形を生み出し、あるいは知覚するためのモデルとしての三角形が私達の頭の中にあるはずである。この三角形は角の大きさや辺の長さなどに関する具体的指定がいっさいなされておらず、視覚イメージとして描くことのできない高度に抽象的な心の中の構造体であるといえる。イメージ・スキーマとはこの抽象的三角形にたとえられるとレイコフはいう。基本的なイメージ・スキーマの多くは人類によって共有されているのではないかと私は推測している。

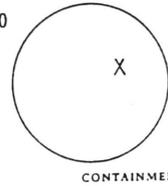
ジョンソン (Johnson, 1987) は、視覚化することのできないイメージ・スキーマをあえて説明のためにイラストを用いて表現している。図9, 10は彼が描いたイメージ・スキーマの説明図である。見るとすぐわかるとおり非常にシンプルに表現されている。道にそっ

図9



Johnson (1987, p.114)

図10



Johnson (1987, p.23)

である地点から別の地点へなにかが移動する「道のスキーマ (path schema) (図9)」、
「入れ物のスキーマ (containment schema) (図10)」などはいかにも普遍的・集合的なイメージ・スキーマという感じがする。これらのイラストに詳細をかき加えようとするほど普遍性が失われ、無意識のうちに文化的・時代的特徴で脚色されてしまう。このことはEPの絵にもそのままあてはまる。EPの絵に詳細をかき加え、具象化すればするほど普遍性が失われ、時空を越えにくくなっていく。私は Richards がEPを製作する時、普遍的イメージ・スキーマに似た考えをいっていたのではないかと推測している。つまり、Richards は彼の絵を全人類が共有するような心の中の図式にできるだけ近づけたかったのではなからうか。しかし、絵が抽象的になりすぎると学習者の理解を犠牲にすることになりかねないから、彼は妥協しながら抽象性と具象性、普遍性と個別性の間の微妙なバランスをとっていったのだと思う。

4. EPの絵とBASIC ENGLISH

この原稿では、時間と空間を越える表現としてのEPの絵に焦点を絞って話を進めてみた。もちろんEPのバックボーンであるBasic Englishも同じ視点からみることができる。室勝さんが何年前のレクチャーで「Basic Englishは平等の思想の上になりたっている」という主旨のことを言っていた。一部の地域の一時代の人々のためだけでなく、平等にすべての人間のための時空を越えた共通の言語をBasicの生みの親であるC. K. Ogdenは夢見ていたのだろうと思う。たとえば、「seat」は腰掛けるものならなんでも良

いのだから、文化的束縛から自由な語である。しかし、'chair', 'stool', 'sofa' などと言いだめたとたん文化的脚色が始まる。室さんは、'home' が850語の Basic のリストからはずされた一つの理由はそれがアングロサクソン文化特有の独特な感情を呼び起こすからではないか、と言う。地域的個性をできるだけ排除しようとする姿勢はBasicを生み出した思想的母体の最も重要な部分の一つだろう。この意味で、EPの絵は Basic English の思想にぴったりと呼応していると言える。Basic と同様、EPの絵も一つの思想、哲学の表現としてみるができるわけである。

5. おわりに

普遍性や抽象性を強調しすぎたかもしれないが、私はべつに文化的多様性や具象性の大切さを否定したりないがしろにしてよいと言っているわけではないので誤解しないでいただきたい。普遍と個別、抽象と具象のバランスをうまくとりながらテキストを作る必要があるのはもちろんのことである。しかしながら、

最近英語のいろいろなテキストを見ていると特定の文化的・地域的な特異性を全面に押し出し過ぎる傾向があるように思えてならない。さきほどのべたようにEPはそれとは逆の指向性をもっており、その意味でもユニークな存在である。EPのようなテキストがもっとみなおされてもよいのではなかろうか。

参考文献

- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Reason and Imagination*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Richards, I. A., and Christine Gibson. 1945. *English Through Pictures, Book I, II*. Yohan Publications, 1986.
- _____. 1957. *English Through Pictures, Book III*. Yohan Publications, 1981.

Basic Japanese を 模 索 する

あげる くださる もらうをめぐって

小 川 和 子

— はじめに —

日本が経済大国、技術大国になるにともない日本語を学ぶ外国人が急激に増えている。それにともなって外国人に教える日本語の確立を叫ぶ声が、日本語学者からばかりでなく経済人、技術関係者からもあげられている。しかし具体的に何をどう教えるかについては甲論乙駁で結論がでていないのが現状であろう。私は今、教えながら、思考錯誤しながら一つずつ積み重ねて Basic Japanese らしいものを作りあげようとしているところである。例えば「Bag=かばん」と覚えて来日した人は、ビニール袋も紙袋もハンドバッグも化粧ポーチも「かばん」と言う。「かばん」「袋」「バッグ」の三つくらいは教えたいところだが、学習者にはわずらわしいだろうか、これらを包括する適当な語はないだろ

うかと悩んでいる。

「先週」「先月」を教えると生徒はすぐに「私はセンネンの九月に日本に来ました。」と言う。「前の週」「前の月」と教えるべきだったか。同様に「来月」「来年」を教えると「池袋で電車に乗りました。ライエキは大塚でした。」と言う。「次の月」と教えた方がよかったのだろうか。しかし「私は1985年に上海に行きました。その前の年には北京に行きました。」「来週試験が三つあります。次の週には四つあります。」のように使われるべきで、「来年」の意味で「私は前の年の九月に日本に来ました。」とは言わないと主張する人が多いのではないだろうか。

— 一般的な問題 —

Basic Japanese (以下BJと省略) は語

彙だけでなく文体、文法の面からも考えなければならぬ。この点をいくつか考えてみよう。

1. 人称代名詞について

日本語では話し手が自分を表わす一人称代名詞、そして相手を表わす二人称代名詞がいくつもあり、自分と相手との関係によって使いわける。しかしBJではそれぞれ一つづつ「わたし」と「あなた」を取りあげたらどうだろう。生徒が大人の場合はもちろんこれでよい。子供の場合もこれで通す。「ぼく」は教えなくても日本人と遊んでいるうちに自然に覚えるだろう。男の子が「わたし」と言って、いじめられないかとの心配は残るが。

英語では人称代名詞は使用頻度が高く全語彙の十分の一を占めるが、語自体が I, You 等の様に短いこともあり、くりかえし使っても耳ざわりではない。しかし日本語では、「私が」「私が」と言うとき自分の事を主張しているようで、相手に不快感を与えるし、相手の事を「あなた」と言ってもやはり不快感をさそうことになる。使わなくてすむ時は使わずに前後の文脈でそれと察しさせるのが好ましいとされている。しかし外国人（日本語を母国としない人）と話す時は、できるだけ人称代名詞を使おうと私は提案したい。次の例文は日常何気なく使う文だが、日本語を相当勉強した人にも非常に難しい。何故か考えて下さい。

- ・何度起こしても全然起きないんですよ。
- ・歩いて行くと言ったのにわざわざ車で迎えに来てくれた。
- ・もう十八才なんだから子供扱いしないでほしい。

2. 動詞の限定

Basic English ではいわゆる動詞は16に限定されている。経済評論家の石山四郎氏は「日本語ジャーナル」で日本語の整理についていくつかの提案をしているが、その中に「getのように多様な意味を持つ動詞いくつかに限定する」というのがある。

片桐ユズルさんは日本語教科書（『はじめてのほんご』大修館）の中で用途の広い語の一つとして「つける」をとりあげている。

- ・くぼさんはぼうしをつけます。

・私はうわぎをつけます。
となっている。更に「手袋をつける」「靴をつける」「めがねをつける」と拡がってゆくことになる。そうすれば、「着る」「かぶる」「はめる」「はく」「かける」が不要になり学習者には便利である。「つける」は漢字だと「着ける」「付ける」「就ける」になり、意味は更に広がり、水面に顔をつける、家計簿をつける、道をつける、職をつける、あとをつける、色をつける、名前をつける、文句をつける、気をつける、話をつける、行きつけの店、何かにつけて、等々小さな辞書でも30くらいの用法が出ている。たいへん有用な語である。しかし先に書いた「ぼうしをつける、靴をつける」を日本人が認めるかどうかの問題になってくる。BJは結局 native speaker である日本人の問題である。

3. 数の言い方の単純化

前述の片桐ユズルさんの教科書には、

- ・このむしにはあしがむつつと、はねがよつつあります。
- ・手にはゆびがいくつかあります。

となっている。「日本語ではこうは言わない。」と言うのは傲慢であろう。

これは日本の学校に通っているある外国人の少年の実際にあった話である。クラスの友達（こういうのも友達と言うのだろうか）から鉛筆を数えろと言われ、「いっぽん、いっぽん……」と数え出したら、変な数え方をするといじめられた。その少年は一晩考えて、翌日「お前たちだって自分の事をニホンと言ったりニッポンと言ったりするではないか。」と反論したら、生意気だとよけいにいじめられたと言う。このような胸の痛くなる話は枚挙にいとまが無い。外国人の使う日本語に、日本語を母語とする私達はもっと寛容でなければならぬと思う。

4. 敬語をやめる又は単純化する。

日本語の美しさを守るために、またコミュニケーションを円滑にするために敬語は必要だと主張する人もいるが、それを外国人に習得させる必要はないだろう。日本語の丁寧さのレベルは大きく分けて次の三段階ある。

1. これは桜の木だ。 （普通体）
きのう日光に行った。

2. これは桜の木です。 (丁寧体)

きのう日光に行きました。

3. これは桜の木でございます。(御丁寧体)

きのう日光にまいりました。

きのう日光にいらっしゃいました。

私は先ず2. のレベルを教えているし、多くの初級教科書も同様である。発表用にはそれでよいが、自国で一年間日本語を勉強して来ても日本人の言うことがわからないという学習者が多い。日常の会話ではもう少し下のレベルで話される事が多いからだろう。彼等と話す時は、丁寧さのレベルを考えて話そう。

5. 表記法の簡略化

これには漢字の数を減らす、送りがなをつける、漢字の読み方を減らす等が考えられる。「行」は「行く」はよいが「おこなう」はかなで書く。「上」は五通りの、「下」は八通りの読み方があるが、整理が必要だろう。

— あげる、くれる、もらうをめぐって —

タイトルの三語の類語をあげてみると、与える、授ける、賜る、やる、あげる、さしあげる、ゆずる、贈る、わたす、くれる、くださる、受ける、よこす、授かる、もらう、いただく、頂戴する等がある。いずれも動作の主体者Aが自分に属する物Cを相手Bの側に移す行為をあらわす。

AはBにCをくれる、または、くださる。

AはBにCをやる、または、あげる。

上の四語をB Jに採りあげてみる。下の例文の空欄に入れてみて下さい。

1. あなたは私に本を ました。
2. 田中さんは私に本を ました。
3. 田中先生は私に本を ました。
4. 私はあなたに本を ました。
5. 田中さんはあなたに本を ました。
6. 私は田中さんに本を ました。
7. あなたは田中さんに本を ました。
8. 川井さんは田中さんに本を ました。
9. 私は息子に本を ました。
10. あなたは私の娘に本を ました。
11. 田中さんは私の娘に本を ました。

相手Bが一人称の場合くださる (くれる) になる。10. 11. ではB (私の娘) は自分と一体と考えてくださる (くれる) になる。

ABの上下関係や話される場面によってくれるとくださる、やるとあげるを使い分けるべきか、それともくださる、あげるを必要語とし、くれる、やるは無くしてすませるか、又はその逆か、それともあげる、くれるを採るか。皆様はどう考えますか。私は色々な人にたずねたが「くださるなんて社長さんがくださった時くらいしか使わない、絶対くれるがいい。」という人、「くださるを使う。」という人、「やっぱり使い分ける事を教えるべきだ。」と言う人など様々だ、私の今の考えは「失礼のない言い方をひとつというならあげる、くださるを教えるのがよい」である。

上の例文のいくつかは不自然だ、もらうを使うべきだと言う人がいるかもしれない。もらうについて少し考えてみよう。

AはBにCをあげる (くださる)。

→BはAから (又はAに) Cをもらう。

の関係がある。もらうは

太郎はおじさんからお年玉をもらいました。

太郎はおじさんにお年玉をもらいました。の二つの格が並立する。二つの文の意味のちがいを強いてあげれば、「に」はおじさん(A)の発意で太郎(B)にお年玉を与えたのであり「から」はBの発意でAにせがんで金を手にいれたとも解せる。その場合でもAの意志で決定している。私達は普段そこまで考えて言い分けてはいないだろうし、多くの日本語教科書もその辺はあいまいである。

しかし「に」は到着点(山に登る)、移行行為の目的(見に行く)、結果(先生になる)を表し、間接目的語(田中さんに本をあげる)に使われる。一方、「から」は出発点(駅から5分)材料(木から紙をつくる)原因(誤解からけんかになった)等を示すので、

太郎はおじさんからお年玉をもらった。

の文だけを教えた方がよいと思う。また、先生から / に本をもらいました。

は両方使えるが、

会社から給料をもらいました。

ではには使えない。「……にもらいました」の形はもうひとつ、

田中さんは結婚祝いにジョンさんからネクタイをもらいました。

もあるので

BはAからCをもらう

の形だけを教えるのがよいと思う。

もらうとくださるはどちらがうのだろうか。

くださるは与え手の意図、もらうは受け手の意図が大きい。

○僕はいらないと断ったけど父は小遣いをくれた。

×僕はいらないと断ったけど父から小遣いをもらった。

あげる、くださる、もらうの関係は、いわゆる「やり、もらいの関係」とか「授受表現」とか言われて日本語を教える際に非常にむずかしいところとされ、試験問題の重要な項目になっている。そう考えられる理由は二つある。その一つは、与え手、受け手の人称によってあげる、くださるを使い分ける事、人称の考えが、ヨーロッパ系の言語とは異なる事である。

もう一つの理由は日本語には次のような他動詞／他動詞対応がある。

AはBに金を預けた。

→BはAから金を預かった。

AはBに手紙をこつづけた。

→BはAから手紙をこつづかった。

同様に、「言いつける／言いつかる」「授ける／授かる」等、ところが「あげる、くださる」と「もらう」は別の動詞で他動詞／他動詞対応している。

私は田中さんに本をあげました。

→田中さんは私から本をもらいました。

このような考えからか、多くの日本語教科書

は、あげる、もらう、くれるを同時に教え、更に、くれるとくださる、やるとあげるの使い分けのしかたまで教えている。わざわざ生徒を混乱させるようなものである。

1. くれる、やるは教えない。「私は息子に本をあげました。」でよいことにする。

2. あげる、くださるを先ず教え、充分に定着してから、もらうを教える。*ENGLISH THROUGH PICTURES* ではGIVEはp. 19でGETはp. 71で教えている事も参考になるだろう。これが私の提案である。但しもらうを教えるまでは「私は結婚祝いにジョンさんからネクタイをもらいました。」の文を教師も口にしないように気をつけなければならない。相当苦しい事である。Basic Japaneseは結局日本語を母語とする我々の問題である。

参 考 図 書

はじめてのほんご I 片桐ユズル、大修館
基礎日本語 I, II, III 森田良行、角川書店
日本語の類意表現 森田良行、創拓社
日本語新版 (上)(下) 金田一春彦、岩波書店
日本語は国際語になるか 日本未来学会編
TBSブリタニカ
日本語文法ハンドブック 長島達也、
パナリング出版
別冊日本語ジャーナル日本語教師読本 I
アルク出版
自然な日本語 桜井晴美 さかまち出版
ENGLISH THROUGH PICTURES I
I. A. Richards, Christine Gibson, 洋販

室 勝 訳 『方丈記』 を 読 む

安 西 聖 雄

先日、鴨長明の『方丈記』のベーシック・イングリッシュによる翻訳が北星堂から出版された。翻訳者は室勝先生である。10年以上この仕事に取り組み、多くの訳を試みた成果である。この翻訳では、ひとつの原文に対し、3つの訳文を掲げている。それはベーシックの効力を実感させてくれる。また、場合によっては原文の解釈の違いを訳し分ける試みをしている。画期的な翻訳である。感嘆するだけ

でなく、ベーシックによる実践への一步を踏み出させる勇気も与えられる。また、意味とは何ぞやを考えるとときのテキストにもなる。参考に、いくつか原文と翻訳を紹介する。

(1) ゆく川のながれは絶えずして、しかも、もとのみずにあらず。

(a) The river keeps going all the time and the water is not the same as what has gone before.

(b) The river never comes to a stop and the water is different from what has been there.

(c) The river is in motion all the time and the water is never the same as what has been there.

(2) かの地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。

(a) It seemed to me that even the burning wind given as punishment to those in the *inferno* might not be so cruel as that.

(b) I had a feeling that even the violent wind of great heat in the place of punishment for wrongdoers after death would not be so cruel as all that.

(c) I was certain that only the strong wind which might be experienced by wrongdoers in the Dark Land would be as cruel as all that.

(注) *inferno* はイタリック体によって Basic English でないことが示されている。しかし、他の訳によってその意味が知られる。

(3) また、勢いある者は、貪欲深く、独身なるものは、人に軽められる。財あれば、おそれ多く、貧しければ、恨み切なり。

(a) A man in power has greater desires for more than is necessary. A man having no relations is made little of by others. If a man has much money, he

has more fear than others. If he is poor, deep is his feeling of hate for those better off.

(b) Anybody who has high authority over others does not put a limit to his desires and anybody having no one he is dependent on is not respected. One who is well-off has fears for loss of his property. One who has little money is full of bitter feelings for those well off.

(c) One in a position over others has a marked tendency to get more property, and one who has not strong backer is made little of. A man of great property has fears for it to be taken up while a poor man has a feeling of hate for a moneyed man.

こう見てくると、文体面でも多大な努力がみられる。ベーシックでは、-ing や -edなどを自在に使い、語の組合せをする。しかし、文法の授業で読解のために習ったことが、ここでは表現のために自由に使われていて驚くばかりである。

最後に、物についても説明的に翻訳し、全体に解けこんでいる例をひとつだけ紹介する。「南に懸樋あり」を、“On the south is a water-pipe through which water comes into a hollow of a mass as stones.”と訳している。

Basic English 関係ブック・リスト

1. *The Bible in Basic English*. Cambridge University Press. 1965.
2. *The Book of St Matthew from the Bible in Basic English*. 洋販出版, 1977.
3. Daniels, F. J. *Basic English Writer's Japanese-English Wordbook* (『英文を書くための辞書』), 北星堂, 1970.
4. Daniels, F. J. *Stories from Okinawa* (『沖縄民話』), 北星堂, 1981.
5. Lockhart, L. W. *Basic Picture Talks*, 北星堂, 1987.
6. Ogden, C. K. 監修 *The General Basic English Dictionary*. 北星堂, 1960.
7. Ogden, C. K. *The Basic Words*, 北星堂, 1977.
8. Ogden, C. K. *Basic by Examples*, 北星堂, 1985.
9. Ogden, C. K. *Basic Step by Step*, 北星堂, 1985.

10. Ogden, C. K. *The ABC of Basic English*, 北星堂, 1986.
11. Ogden, C. K. *The Basic Dictionary*, 北星堂, 1990.
12. 安西聖雄・山田初裕・箕田兵衛・吉沢郁生編著 『ベーシック先生の自己発信する新英語術』リック出版, 1988.
13. GDM鎌倉グループ 『English Through Pictures Bks 1, 2 における Basic English Operations —その文型と意味の展開』GDM Publications, 1971.
14. 『道具としての英語・会話編』(別冊宝島⑭) JICC出版局, 1979.
15. 兵働 努編『850基礎英語の応用』パワー社, 1988.
16. 牧 雅夫 『自信をもって英作文を教える』北星堂, 1980.
17. 牧 雅夫 『自信で使える英語: ベーシック・イングリッシュ』北星堂, 1984.
18. 牧 雅夫 『12の動詞で話す英語・書く英語』北星堂, 1986.
19. 升川 潔監修 『ベーシック先生のやさしい単語でいえる英語術』リック出版, 1983.
20. 室 勝 『500語のできる英語会話』評論社, 1962.
21. 室 勝 『500語のできる英語会話 応用編』評論社, 1962.
22. 室 勝 『意味論における3年の柱』GDM Publications, 1969.
23. 室 勝 『Basic English の文体』GDM Publications, 1972.
24. 室 勝 『意味の定義』GDM Publications, 1972.
25. 室 勝 *Basic English as a Sorting Machine*, GDM Publications, 1972.
26. 室 勝 『新850語で書く英語』ジャパントイムズ, 1973.
27. 室 勝・小高一夫 『英語を書く本 ベーシック・イングリッシュの理論と活用』洋販出版, 1982.
28. 室 勝 『ベーシック・イングリッシュ入門』洋販出版, 1985.
29. 室 勝 『ベーシック・イングリッシュ一歩前進』北星堂, 1986.
30. 室 勝訳 『方丈記』北星堂, 1990.

G D M と 言 語 習 得 の 原 理

佐 藤 正 人

言語学における生成文法の出現は、人間の「知」の研究に認知革命と呼ばれる大変革を引きおこし、言語学・心理学・情報科学にまたがる新しい科学(認知科学)の成立をもたらした。言語の構造とそれを操る心の仕組みについての我々の理解は、この30年間に飛躍的に進歩した。本稿では生成文法の知見の一端をとりあげ、それが外国語習得ひいてはGDMに示唆するものを考える。

1. 言語習得と普遍文法仮説

行動主義は、言語習得を習慣形成と考えた。行動主義に限らず経験主義的な学習理論では、言語は類推や一般化的作用によって帰納的に習得するものとされてきた。だが、我々が日頃な

にげなく使っていることばの中には、経験事実からだけではどのようにしても習得不可能と思われる文が多数含まれている。たとえば、

(1) Mary bought a puppy to play with.
 という文は、play with に対する Mary と puppy の関係について

(2) for Mary to play with the dog
 の解釈は許すが

(3) for the dog to play with Mary
 の解釈を許さない。ところが一般に

(4) NP₁ plays with NP₂
 がいえれば

(5) NP₂ plays with NP₁

も必ず成り立つので、(1)の文について(3)の解釈を排除する意味的な理由は何もない(chomsky

1981)。だが英語を母国語とする人々がその習得過程で、(1)について(3)が許されないことを示す事実に出会うとは、きわめて考えにくいことである(子供が親に向かって、playの主語がMaryかthe dogかをたずねることなど、まったくありそうもない!)。にもかかわらず、彼等は子供であっても、この解釈を誤ることはないといわれている。

また、英語では

(6) I think Tom is the youngest.

という文で、Tomの部分をつねたければ

(7) Who do you think [t] is the youngest?

のように、wh語による疑問文をつくることができる。文中のtはwhoがもとあった位置を示す記号で痕跡(trace)と呼ばれる。ところが

(8) This is the table (that) John made.
では、whoを使って疑問文をつくらうとしても、その結果を生じる。

(9)*Who is this the table (that) [t] made?

は非文である。(9)が意味的におかしいわけではないことは、日本語では(9)に相当する

(10) これは誰が作ったテーブルでか。

が適格であることから確かめられる。英語に限らず、一般に関係節などの付加部(修飾要素)からは内部の語句を取り出すことができないという制約がある。上の例で(10)が適格なのに(9)が非文となるのはこのためである(日本語の疑問文形成では要素の移動を必要としない)。同じ理由から、次の(11)は適格であるが(12)は非文となる(今井他1989, 大津1987)。

(11) Which table did you put the book on?

(12)*What reason did you leave early for?

問題は、英語(日本語)の母国語話者がなぜ(7)(11)あるいは(10)が文法的であり、(9)(12)は非文であると知っているのか、そう判断できる知識(直観)をどこからどのようにして獲得したのかということである。(9)(12)のような文は日常生活の中で使われることがないから異様に感じるのだということにはならない。使用頻度の低い文が異様に感じられるとは限らないし、先にあげた(1)の例では、人が(2)と(3)のどちらの解釈をとっているか(そのための特別な工夫をしない限り)普通はたしかめようがないからである。

なにより人間の言語は、必要とあらばいくらでも新しい(聞いたことも自分が使ったこともない)文をつくり出した理解できる創造性こそが、その特色なのである。

経験のみによっては到底獲得できそうもない豊かで複雑な知識を人間が持っているのはなぜか。この問いをチョムスキーは「プラトンの問題(Plato's Problem)」と呼び、人間が獲得できる知識はその基本的な枠組みが(遺伝情報によって)生得的に与えられているのだと主張する(Chomsky 1986)。だとすれば、人間に限られた(しかも個人々人によってさまざまに異っているであろう)言語経験から一様かつ高度の言語能力を獲得できるのは、言語知識(文法)の基本的な枠組みが生まれながらに備わっているからだということになる。

子供はだれでも生れ育った言語環境に即してそれぞれの言語の使い手となる。だからことばの枠組み(文法のヒナ型)というものはすべての言語に共通であるに違いない。このヒナ型を普遍文法(Universal grammar, UG)と呼ぶ。普遍文法仮説を直接検証することはできないが、言語の習得という事実を最もよく説明する理論であることは間違いない。

2. 原理とパラメータのアプローチ

普遍文法(UG)はいわば半完成状態の文法である。UGは諸言語すべてに普遍的に適用される幾つかの基本原則で構成されているが、各々の原理はその一部がオプション・メニューになっていて、可能な選択肢のどれかひとつを選ぶことができる。このオプション部分をパラメータといい、それぞれの最適値を実際の言語経験にあわせて選んでいくと、最終的に特定の言語の文法ができあがり作動し始める。これが「原理とパラメータのアプローチ」と呼ばれる普遍文法の理論である。

UGの各原理はきわめて単純な内容をもって、互いに関連し合って広範囲に作用するので、パラメータのわずかな変化が、個別言語間のさまざまな文法的差異となってあらわれる。日・英語を例にとると、主語の性質(多重「主語」)・wh語の移動・代名詞の修飾可能性・語順の自由度・形態素による複合述語形成(食べさせられた)・主語と助動詞の語順転

換(疑問文)などについて、両言語間には興味深い違いが観察される。ところで、一見互いに何の関係もないと思われそうなこれらの現象が、文法的一致(主語と動詞の数・人称による一致など)にかかわるただひとつのパラメータからすべて導き出されるとする驚くべき可能性が、最近の研究で明らかにされた(福井 1989)。また日・英語の基本語順の違い(動詞と目的語、前置詞と後置詞、関係節等修飾語の位置など)は、いわゆるヘッド・パラメータにより説明可能である。

もう少し具体的に、たとえば

(13) John put the book on the table.

という文について考えてみると、動詞 put は文中で目的語となる NP(名詞句)と場所の PP(前置詞句)を必ず伴い、それらと VP(動詞句)を形づくっている。このとき、put をこの VP の主要部(head)、NP と PP を一括して補部といい、put は補部に先行する。またこの PP も前置詞 on が主要部、NP(on the table)がその補部となり、やはり on が補部に先行する構造をもっている(便宜上ここでは冠詞やテンスの問題を無視する)。ところが英語では主要部が一貫して補部に先行するが、日本語などでは補部が主要部に先行する。そこで、句構造が、主要部と補部から成り立つことはすべての言語に共通の一般原則であるが、主要部の位置についてはパラメータ化されていて、言語によって異なる可以考虑ができる。日本語は主要部後置、英語は主要部前置の言語であり、名詞句における関係節などもこの原則に従っている。

ところで実際の言語習得では、何が主語でどれが動詞であるとか、名詞はどれで前置詞はどれかといったことが、たとえば(13)にラベルがついて識別できるようになっているわけではない。そこで(13)が実際に使われる場面や状況から John がその行為者、the book が対象、on the table が場所であることが読みとれたしよう。すると我々の脳は、put が動詞で、対象と場所の2つの要素を補部にとること、また動詞と補部全体(VP)の意味から主語が行為者であることを知り、さらに動詞が補部に先行することからヘッド・パラメータの値を主要部前置に固定する。行為者と対象の意味は典型的に

NP、場所は PPによって担われるものとすれば、put について「対象と場所の要素を伴う」という情報を記憶しておくだけで、(13)に相当する構造

(14) [NP] [VP put [NP] [PP]]

を生成できることになる。

意味カテゴリーと文法カテゴリーを対応づける試みは生成文法の初期にも行われたが、今日ではそれをUGの一部に組みこむことにより、場面(状況)の与える意味情報だけを用いて、ひとつの言語の文法全体を習得する仕組みが可能だと考えられるのである。

3. 外国語学習とパラメータ理論

これまで述べてきたことは子供の言語習得についての理論であり、それが大人の外国語学習にどれだけあてはまるか、たしかなことは何もいえない。そうだとすると、意味から文法が習得できることを明らかにしたパラメータ理論が、「なぜ(どのようなメカニズムで) situation で教えることができるか」を考えるうえで重要な示唆を与えることは確かといえよう。脳とコンピューターは同じものではないが、コンピューターの研究が脳のはたらきを理解する大きな年がかりになるのと同じことである。大人といえども、外国語の環境で暮せば相当の程度にまでその言語に熟達するもので、この事実はいずれにせよ説明されなければならないのである。

White (1988) は、第二言語(外国語)の習得過程で母国語と目標言語のパラメータの違いに起因する文法的誤り(いわゆる「干渉」)が起り得るとし、母国語の文法から、いわばそのパラメータの値を目標言語にあわせて「切り換える(parameter-resetting)」という習得モデルを提案している。彼女によれば、外国語の習得では修正すべきパラメータの一部がなお未修正である中間言語が生じる過程を経て、最終的な目標言語へと接近するのである。UGの何らかの関与がいずれにせよ言語習得の前提である(Chomsky 1975)とすれば、多かれ少かれ子供の母国語習得と似通った仕組みで、大人も外国語を習得していくことは、確かなように思われる。ちなみに近年流行のインプット理論は、子供と大人の言語習得を基本的に同一と見なしている(Krashen 1982)。

UGの関与が大人の外国語習得にも必要であるとするれば、GDMはその過程を、いわば極限まで効率を高めて教室で実現しようとする試みといえるのであろう。

(1) SEN-SIT によって、語彙（特に動詞・前置詞）の意味特性を明確に提示できる。

(2) 前置詞句・SVO・後置修飾（関係節等）と、ヘッド・パラメータの関連項目が早期に集中し、基本語順が速かに確立される。

(3) Wh 疑問文と関係節は多くの共通性を持ち、同一の操作（wh 移動）によって生さる構造なので、wh 疑問文から関係節を続けて導入するのは合理的な方法である。

日本の英語学習者に共通の欠点として「話せない・聴けない」ことのほかに、読みの過程で「逆行」が多く極端な遅読であることが従来から指摘されている。これらはいずれも語順に即したリアル・タイムの人力処理ができないということで、ヘッド・パラメータが本当に確立してはいないことを示唆するものである。だから少し長い（埋めこみ等を伴う）文に出会うと、文節単位のチャンク化を短期記憶の範囲内ではできなくなって、お手上げとなるのである。GDMで学んだ生徒は長い複雑な構文を苦しめない。こういう指導はGDMの効果が最も期待で

きる領域であり、本格的な英語学力を養成する基礎訓練としてGDMを応用することは、たいへん興味深い研究課題と思われる。パラメータ理論はその可能性を裏づけるものである。

参考文献

Chomsky, N. (1975) *Reflections on Language*, Pantheon Books.

_____ (1981) "Principles and Parameters in Syntactic Theory," in Hornstein, N. and D. Lightfoot (eds.) *Explanation in Linguistics*, Longman.

_____ (1986) *Knowledge of Language*, Praeger.

福井直樹(1989)「句構造の理論と比較統語論」『言語』18:7-10。

今井邦彦他(1989)『一步すすんだ英文法』大修館書店。

Krashen, S. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*, Pergamon.

大津由紀夫編(1987)『ことばからみた心』東京大学出版会。

White, L. (1988) "Universal Grammar and Language Transfer" in Pankhurst, J. et al. (eds.) *Learnability and Second Language*, Foris Publications

活動報告 (1988年9月～1989年8月)

GDM英語教授法セミナー (東西支部合同)

- ▶中級セミナー 2月4日(土)～5日(日)
京都府婦人セミナー 参加者36名
- ▶春期セミナー 3月26日(日)～29日(水)
大阪YMCA六甲研修センター
参加者40名
- ▶夏期セミナー 8月19日(日)～22日(水)
日本YMCA同盟東山荘 参加者55名

公開講演会

- <東日本支部> 6月3日(土) 2:30～5:00
中野サンプラザ 参加者93名
講演「基本動詞をどう教えたらよいか」
田中茂範; 「GDMとは……」山田初裕
GDMによる中学生の授業 瀬倉祥子;

GDMによる成人の授業 唐木田照代

- <西日本支部> 6月24日(土) 2:30～5:00
山西福祉記念会館 参加者60名
講演「パフォーマンスと言語学習」片桐ユズル
体験授業1: タガログ語 迫田久美子;
スペイン語 片桐よう子; 中国語 昆布孝子
体験授業2: take 吉沢郁生; what (rel.) 川上伊都子; make 岡谷よし子

月例会

- <東日本支部>
9月17日(土) 3:00～5:00 参加者39名
豊島区勤労福祉会館

- 総会；デモ：account (BK II, p.110)
島谷靖子；トーク「もう一つの英語圏—オーストラリアの英語」伊達民和
- 10月22日(土) 3:00～5:00 参加者20名
渋谷区立新橋区民会館
デモ：was 福井洋子；トーク「読解力テストを考える」安西聖雄
- 11月12日(土) 3:00～5:00 参加者16名
横浜アカデミー
デモ：Passive Voice 井原まさ子；トーク「EPの絵について」東山永
- 12月3日(土) 3:00～5:00 参加者24名
千代田生命研修センター
デモ：make 田幸徹；トーク「ベーシック風の英語」牧雅夫
- 1月21日(土) 3:00～5:00 参加者40名
渋谷区立新橋区民会館
Class Observation (小学6年生) “do”
山本桂子；トーク「GDMとゲシュタルト」山田初裕
- 2月18日(土) 3:00～5:00 参加者32名
文京区教育センター
トーク「私の一般意味論」岩宮節子；体験授業：フランス語GDMその1 鈴木あさ；デモ：bebore, after (conj.)
新井等
- 3月11日(土) 3:00～5:00 参加者28名
トーク「ルートセンスについて考える」柳沢康司；デモ：Passive Voice 唐木田照代
- 4月15日(土) 3:00～5:00 参加者27名
渋谷区立新橋区民会館
デモ：like (BK II, p.10) 菅井由紀子
トーク「Qualities について」箕田兵衛
- 5月13日(土) 3:00～5:00 参加者41名
豊島区勤労福祉会館
デモ：過去分詞と現在分詞 山田初裕；
トーク「学校に行かない子供たちとともに」佐藤由美子
- 7月15日(土) 3:00～5:00 参加者25名
神楽坂エミール
デモ：some 多羅深雪；体験授業：フランス語GDMその2 鈴木あさ；
トーク「Basic Categories—認知心理学とGDMの接点」佐藤正人

<西日本支部>

- 9月25日(日) 2:00～4:30
梅田第三産経学園
デモ：here, there 海土泊辰実；トーク「図解による要約文づくり」花田千鶴子
- 10月30日(日) 2:00～4:30
梅田第二産経学園
デモ：was 宮田忍；受動態 植田友子；
トーク「京都精華大学アメリカ研修旅行雑感」原田弘
- 11月27日(日) 2:00～4:30 参加者19名
京都イタリア会館
デモ：this, that 辰巳弘子；have 花田千鶴子；
トーク「外国語としての日本語」梶川よ志子
- 12月18日(日) 2:00～4:30
梅田第二産経学園
デモ：put 杉本昌子；keep from～ing
メイヤーさよ子；トーク「I. A. Richards を再評価する」梅本裕
- 2月5日(日) 2:00～4:00 参加者33名
京都府婦人センター
デモ：GDMによる小学生の実際の授業
片桐よう子；トーク“Comparing communicative functional patterns in Japanese and English”キム・カネル
- 3月5日(日) 2:00～4:30 参加者16名
デモ：go 難波和彦；sense of motion
松川和子；トーク「異文化理解を目指したテキスト編集について」伊達民和
- 4月23日(日) 2:00～4:30 参加者19名
芦屋市民センター
デモ：its 寺崎公宣；have to 川上伊都子；
トーク「Discourse におけるinference について」村上光久
- 5月20日(日) 3:00～5:30 参加者31名
福島区民センター
デモ：What? 大浦宏美；seem 平井紘子；
トーク「Japanese Through Pictures」片桐ユズル
- 7月23日(日) 2:00～4:30
京都イタリア会館
デモ：仮定法 原田弘；here, there
中平裕子；トーク「発音クリニックとともに」中郷安浩

The Basic Dictionary

C. K. Ogden 著 北星堂

Good news to Basic lovers! *The Basic Dictionary* (1932) のリプトンが北星堂から出ます。すでにみなさまおなじみの *The General Basic English Dictionary* (1940) とどこがちがうかということ、1940の本は約2万語を「定義」したのですが、1932年の本は約7600語をベーシックに「いいかえ」をしたものです。「定義」をそのまま文中にもってくるとながたらしくなって、たいへんです。しかしこの小辞典はてっとりばやく「いいかえ」をおしえてくれるので、ベーシックで書いたり話したりしようというときには、とても便利です。Basic から wider English への逆引辞典としてもつかえるし、学生にもたせて英語を英語でおぼえさせる英英辞典の第一歩とか豆単としてつかうこともできます。愛すべき小辞典です。(片桐ユズル)

— <<短 信>> —

▶ Constance S. Chappell さんが、本年3月4日亡くなられた。日本に生まれ、戦前から約40年間、東京女子大学で英文学を教えた。一方、戦争中に帰国した折、ハーバード大学でGDMを知り、戦後GDMを日本に紹介した。彼女が初めて日本の子供たちにGDMで教え始めたのは昭和22年頃のことである。そこを源流にして、日本におけるGDMの実践と研究が始まった。なお、それに先だつ2月11日、双子姉妹の姉にあたる Mary E. Chappell さんが亡くなっている。津田塾大学で英文学を教える名物教授だったという。お二人のご冥福を祈る。

▶ 日本ベーシック・イングリッシュ協会が発足した。会長に室勝氏。近いうちにベーシック・イングリッシュ60周年記念を兼ねた発足集会が開かれる予定である。

▶ 今年も8月18日~21日、静岡県御殿場市で夏期セミナーが開かれる。日本語教授法のクラスもできる予定である。(吉沢)

『はじめてのにほんご』

片桐ユズル著 大修館書店

JP(Japanese Step by Step with Pictures)ができました。『はじめてのにほんご』というなまえで大修館からでます。ねだんは2060円。なかみとしては、EP Book 1の半分、whichのあたりまでをカバーしました。類書にも、EPにもない特色として、*Frist Steps in Reading English* にならって、ひらがなの導入をgradingしたことです。多羅深雪さんがよんでくださった80分カセットテープが別売で2370円です。(片桐ユズル)



— 編集後記 —

今年はベーシック・イングリッシュが作られてから60周年にあたる。そこで、増ページで「ベーシック・イングリッシュとGDM」で特集を組んだ。最新の研究の成果にあふれる論考を寄せていただいた方々に感謝している。これを一つのステップとして、言語学・音声学・日本語学・英語学・心理学・教育学のさまざまな知恵が交流され、GDMの実践が深まり広がっていくことを願っている。

意見・感想・批判などがあれば自由に事務局までお寄せいただきたい。

(編集 吉沢郁生・難波和彦)